

旧跡——血と塩の記憶

sample

sample

## 第一章

一

西曆一九五一年十月二十四日、その日は旧曆九月二十四日でちょうど「霜降」に当たっていた。その日の朝、凜々しい姿の銀城イシゲヤシ市軍事管制委员会主任王三牛ワンサンニウ師団長は、勝利の喜びに心を昂たかぶらせながら、手をさっと高く挙げると、果てしなく降りしきる秋の雨を切り裂くように振り下ろし、濃厚な山東訛りで歴史的な宣告を下した。

「反革命分子を刑場に引き出せ！ 即刻銃殺！」

この命令に震え上がったためか、それとも過度に屈折して、しかもあまりに出し抜けに叫ばれた山東訛りがひどく耳慣れなかったためか、長江上流に位置する銀城市十万人の市民の二十万の眼は、興奮した王三牛師団長の顔を食い入るように見つめたまま少しも動かなかつた。すると間髪をいれず、処刑執行隊長劉光弟のさらに昂った凄まじい命令の聲が、陰湿に凍りついた驚愕の放心状態を

打ち破った。百八人の反革命分子、その襟首に差し込まれた百八枚の罪状書の白い札、彼らは弾倉帯を胸に掛けた敵めしい解放軍兵士に押されたり引き摺られたりしながら、警備の警戒線の中へと集められた。そこは旧軍営練兵場跡に面するところで、山に沿って石堀が築かれていた。石堀は濡れそぼってびっしりと青苔に覆われていた。一瞬、揺らめく白々とした百八枚の罪状書の札が、柔らかな緑の青苔の上に幽鬼のような無気味さで映し出された。

百八という数字は王三牛師団長自らが選んだもので、報告の上がつてきた殺すべき反革命分子のリストは百八よりはるかに多かったのだが、梁山泊の英雄百八に対する山東人のこだわりのためか、王三牛師団長はこのもつとも盛大な「反革命鎮圧」大会にこの数字で臨んだのだ。処刑執行隊長劉光弟の秘かに数えたところでは、百八人のうち三十二人が李姓で、九思堂李氏一族三家の成年男子のほとんどが含まれていた。処刑執行の前日、劉光弟は軍事管制委員会に「戦闘志願書」を提出し、処刑最初の一発を自分が撃って、この手で自分の大伯父である李氏一族の当主李乃敬を銃殺したいと申し出た。劉光弟の澄みわたった一発目の銃声とともに、正義のために親族を撃つという銃弾がアメリカ式カービン銃の銃口から無情に発射され、李氏一族の当主李乃敬の頭蓋は砕けた瓦の欠片のように、青苔に覆われた石堀まで飛ばされ、「瓦の欠片」の周りには乱れた髪や深紅の鮮血、薄桃色の脳漿が飛散した。その後、間を置かず次々に百七の同じような色彩の飛散が続き、長い石堀は霜の降りた紅葉の林のような斑模様染め上げられた……。

この石堀に沿って右のほうに少し行くと、街を貫いて流れる銀溪が見えてくる。河の水は山の麓

のところで湾曲し、静かな濃緑の深い淵を留めており、山肌の岩壁には蘇東坡の手になる「聴魚池」という大きな三文字が刻まれている。銃声が大きく轟いたとき、聴魚池の濃緑の水面を覆って細波が走り、水面はにわか銀白色に変わっていった。それから、一夜の秋の雨が石堀に粘着した血なまぐさい赤や薄桃色を洗い落とし、人々を震え上がらせた百八発の弾丸の銃声も濯ぎ流した。銀城における李氏一族数百年の統治と繁栄もついに終息したのである。銀城の街角の津々浦々に建てられた李氏一族の数十にも及ぶ大小の頌徳碑、進士記念碑、節婦孝子記念碑などすべてが往時の栄光と威厳を喪失し、通りを行く人々の恐怖に歪んだ表情に曝されることとなった。その後この処刑場は照明付きのバスケットコートとなったのだが、パンパンと弾むボールの音や、ボールの奪い合いでひしめく肉体の姿が、いつも李氏一族の女性たちにカービン銃の轟音とあの並べられた百八の遺体を思い起こさせ、一九五一年十月二十四日、ちょうど「霜降」の日に当たっていた旧曆九月二十四日を思い起こさせるのだった。

その日、李氏一族の中でただ一人処刑隊の兵士に直面しなかった成年男子がいた。彼の名は李乃之、銃殺された李乃敬とは従兄弟同士の間柄であった。当時李乃之は中国共産党地下組織の銀城市委員会書記であり、その後は昇進して省委員会書記となった。銃殺のとき、彼はその無傷の頭部にソ連風のハンチングをかぶって、新中国最初のトラクター操縦士訓練班第一期卒業生を率いて北京東郊の広々とした原野に赴き、「スターリン55型」トラクターを駆使して、耳を聳するエンジン音の中で新中国の沃野を掘り起こしていた。巨大な鉄の犁が深い眠りに着いていた大地を掘り起こす

と、澄みきった秋の陽光が喜びに満ちあふれた黄色い顔の一つ一つを照らし出した。二台の撮影機と多くのカメラが慌ただしくこの「鑄劍成犁」〔武器を農具に鑄なおす〕、「戦闘の」〔時代から平和な建設へ〕という意〕のシーンを撮っていたが、これらのシーンはその後、新中国建設の歴史的成果としてさまざまな文献に掲載されることとなった。

これらの人々が轟音と混乱の中で歴史的なシーンに収められていたころ、李乃之の長男、李氏一族第六十九代の子孫のうち一人となる男児が、実験農場の簡素な医務室の木のベッドで生まれた。彼の出生以前、父親はすでに名前を付けていた。李氏一族は排行（はいう）一族の同世代の者をいとこ関（係まで含めて年齢順に示す数）の序列に従って、世代ごとに祖先の定めた十の文字の一つを名前に付けることになっていたのだが、李乃之はこれを時代遅れの封建の遺物だとして無視し、革命勝利の都北京にちなんで、生れてくる子が男であろうと女であろうと、京生と名付けることにしていたのだ。李京生が産声を上げたとき、実験農場の貯水塔に付けられた二基の大型スピーカーから、まさに最大最高のポリウムで、その時代の雰囲気の色濃く反映した、勝利の喜びと情熱に満ちあふれる歌が放送されていた。実験農場の養成した第一期のトラクター操縦士の卒業を慶祝していたのである。その歌は「土地改革」の勝利によって、地主の財産を分け与えられた農民の喜びを歌っていた。

三頭の牛に、一匹の、一匹の馬、

御者のおいらも思わず笑う、

笑って、笑って、あつはつは。

昔、この車はよー、

おいらたち貧乏人にや、高根の花、

今年はよー、

大きな車がごろごろと、ごろごろごろと、

大きな車がごろごろと、ごろごろごろと、

ごろごろごろごろ回ってなー

おいやっさ！

回り回っておいらの家にやってきた！

歓喜の歌声が高らかに響き、天空と大地を満たしていった。

その後李京生が言葉をしやべり始めたころ、まだ言葉自体はうまく操れないのに、「大きな車がごろごろと……」というのもう歌えるようになっていた。さらにその後、李京生が自分の結婚式の席上で酔っぱらって歌ったのもやはりこの歌だった。

李京生が物心ついたころ、セピア色の写真や白黒の記録映画の中で、ソ連風ハンチングをかぶって勝利の喜びと情熱に満ちあふれた李乃之の姿を見て、何か物足りなさを感じていた。しかし欠けていると思ったのはいったい何か、彼には言い表せなかった。本当は、父の姿に敵めしさが不足し

ていると思つていたので。とくにある種の歴史的な瞬間には必ずなければならぬ風貌が欠けていた。無意識のうちに、彼はあの王三牛師団長のような、さつと手を振り上げて空中に振り下ろすまさに歴史的な動作、ああいう威厳を父親に渴望していたのだ。

後に、李乃之は一九三九年の逮捕入獄の一件によつて再度「査問」を受け、結局大雪の降りしきる夜に死ぬこととなつた。彼は次第に肉体が冷え切つていくときに、理想の実現や革命の勝利などの熱にとりつかれた妄執からついに冷静な覚醒を得て、「人民日報」の紙面の空白いっぱいとその静かな言葉を書き綴つた。

王三牛師団長が勝利の喜びに心を昂らせながら歴史に刻まれる手をさつと高く挙げて、果てしなく降りしきる秋の雨に向かつて切り裂くように振り下ろしたとき、あの白々とした百八枚の罪状書の札が石堀の縁の青苔の上に幽鬼のような無気味さで映し出されたとき、李氏一族の人氣の絶えた大邸宅の蒲団の上に、死んだように青ざめた顔の女が震えながら座つていた。聴魚池の畔で銃声が響きわたり頭蓋や脳漿が飛び散つたとき、この女は突如震えが止まり、両足をひどく下品な姿で投げ出して仰向けに昏倒した。一連の白檀の数珠が彼女の昏倒する瞬間に引きちぎられ、粉々になつた恐怖と絶望とを、計り知れぬ意味を込めて、父母を失つた一人の孤児の前に撒き散らした……後に、この女、李紫痕は弟の李乃之を欺き数珠を直して仏壇を作つた。彼女は女特有の揺るがぬ覚悟と不可思議な直感によつて、弟からの招きをきつぱり断つて李家の古い屋敷に残ることに決めたのだが、この孤児を胸に抱いたとき、引きちぎられた数珠が早くも暗示していた深い意味を読み取つ

てはいなかった。

李京生の母親白秋雲が李京生を生んだとき、あまりにも出産が順調で、医師や看護婦でさえ手持無沙汰だと感じたほどだった。この出産の前に彼女はすでに三人の女兒を生んでいた。その昔、彼女が銀城のあの白玉のように輝く有名な白園の中で、身に雪のような西洋のシルクをまとってブラコンコに乗り、父親に背中を押されて色鮮やかな芭蕉の分厚い緑の枝を揺れて越えたとき、彼女は自分が共産党の地下黨員のもとに嫁ぐとは夢にも思わなかった。そして自分にこんなにも旺盛な生殖能力があるとも考えていなかった。ある偶然の時刻に一人の女の子宮がまったく痛みを感じないまま、何ら邪魔されることなくきわめて順調に、やすやすと温かい流れのような子孫繁殖を成し遂げる。それが三十二の頭蓋と脳漿の飛散を相殺し、王三牛師団長のあの敵めしい歴史的な動作を相殺することになるとは、彼女には思いもよらぬことだった。……後に、白秋雲は白園の美と富のために罪を得、夫の様々な罪名のために罪を得、最終的にそのすべてのために命の代価を支払うことになる。彼女が毅然として自己の命を終わらせようとしたとき、彼女はついにまったく無一文になって金銭的な罪悪感から完全に解放された。そして人類のもっとも醜い野蛮な行為が資産階級ではなくやはり同じように下層階級の人間によってなされたことを見て、大きな慰めさえも感じていた……息を引き取るとき、彼女は千里のかなたに下放されている息子の名を呼び続けた。突然彼に会いたくてたまらなくなったのだ。そのとき彼女は、この一別以来会えなくなった息子が後に歴史学博士となり、その著『中国塩業発展史』のために故郷銀城を訪れ、あの芭蕉と竹林の中に依然とし

て白玉のように輝き、依然として上品で美しい白園の前にたたずみ、歴史のためにではなく母のために涙にくれることになるとは、絶対に思いもよらなかった……。

李氏一族三十二名の成年男子の脳漿が石塀に塗りこめられたとき、李紫痕が祠堂の広間で昏倒したとき、李乃之が「スターリン55型」を駆使して沃野に向かつていたとき、そして李京生が産声を上げたとき、李氏一族の中でただ一人喪服をまとして忍び泣いていた女、それは李乃之の三番目の姉李紫雲である。しかし李紫雲の涙は李家のためのもではなく夫である楊楚雄將軍のために流した涙であり、さらにそれはいかに盛大な葬儀を営もうと変わることのない孤児寡婦の定めのためであり、いかに荘厳な儀式であっても変えることのできない異郷で客死するという自己の最期のためであった。その昔、李氏一族の当主李乃敬は苦心の配慮をめぐらして、銀城の高名な才女李紫雲をついに銀城守備軍の楊楚雄軍団長に嫁がせ、銀城のすべての塩商と資産家たちの羨望と畏怖の的となった。その昔、李乃之は共産党員の嫌疑で逮捕取監されたのだが、姉李紫痕と李紫雲の奔走で処刑寸前に救出された。後に、李乃之はまさにこの救出劇のためにまず延安で査問にかけられ、その後また「文化大革命」で牛小屋（党幹部や知識人などの思想改造のため、主に辺境に作られた強制収容施設）に押し込まれて、あの大雪の舞う夜に死ぬのである。当時、黄埔軍官学校卒業生であった楊楚雄は、故国の大地を失った蒋介石校長に従って台湾に撤退したのだが、敗軍の戦鬪で生涯の盛りのときに早世することとなった。追悼の幟は靈堂の中央に掲げられ、蒋介石校長が涙をぬぐって揮毫した「忠勤堪念」の大きな四文字の白絹の幟もあつた。

後に、李京生は出国ブームの時勢に乗ってアメリカに渡った。彼が手入れの行きとどいた芝生の園をまわって、絨毯の敷きつめられた階段を踏みしめ、バージニア州のあの老人向けマンションに入っていたとき、叔母と甥の二人は抱き合つて涙にくれることとなった。古希の年を越えていた李紫雲は、「血のつながった……私の甥っこ、あなたたち一家に罪を押しつけてしまったのは、私のせいよ、……天のお父様が私たちを引き合わせてくれたんだわ……」と何度も繰り返した。叔母と甥の二人の興奮が収まって、ホールに掲げられたあの「蒼天有眼」〔天は何もかも知っている〕の意という扁額の下で、いつまでも終わらない話をしていたとき、李京生は暮れゆく夕焼けの中で、昔よく見知っていたまばらな木立を突然目にした。夕日が沈みかかり、鳥が巣に帰っていく。彼は急に果てしない哀しみと寂しさに胸がいっぱいになった。

## 二

本当は、李氏一族に対する征圧と革命は一九二七年十二月に起こった銀城五県〔中国では「県」は市より小さな基本的行政単位、「県城」は城壁に囲まれたその中心部の街のこと〕の農民暴動の日から始まっていた。

本当は、その暴動はまだ正式に始まらないうちに失敗していた。

本当は、その暴動のもっとも重大な意義は、そしてもっとも深い影響は、銀城の街中に建てられた威厳のある李氏一族の記念碑の中から李乃之を外に引き出し、正義の名のもとに家を捨てて革命

に走らせたことであつた。数年の後、李乃之は虐殺されつくした共産党地下組織を再建し、李氏一族に対する革命を再び推し進めたのである。

本当は、もしもあの長衣を着た鼻眼鏡の趙伯儒という銀城中学校長がいなかったら、もしもあの陳狗児という農民がいなくて、彼の特異な、そして凄惨な経歴がなかったら、これまで述べてきた一切と、これから話されるはずの一切は大きく変わっていたはずだ。

あまりにもかけ離れた力の差、あまりにも杜撰な計画、あの暴動は失敗するにきまつていた。そのころ銀城を守備していたのはまだ連隊長だつた楊楚雄である。彼は泰然自若として郷里で農民が謀反を起こすのを眺めていた。そして結局、慌てふためいた資産家と塩商人たちが軍資金をかき集めて差し出してくることになるのを待つて、いささかの動揺も見せず五個中隊の兵を五つの県に派遣し、包囲攻撃を開始した。彼の唯一の軍事指令は「機関銃を前面に展開しろ、馬鹿息子たちが目に入ったら、休まずぶつ放せ！」というものだけだつた。果たして、機関銃が吹きわたる風のように地表を掃射すると、暴動組織のすべての部隊は総崩れとなつた。収穫が終わつて広々とした陰湿な畑地には、おびただしい数の死体、おびただしい数の槍や大刀、おびただしい数の食糧分配用の大筥、そして銃声に驚いて飛び立つたまま宙を舞い続けるおびただしい数の美しい白鷺だけが残された。

中国共産党中央の暴動の指令が銀城に伝えられたとき、銀城を中心にした五つの県にはすべて合わせても五十七人しか共産党員がいなかった。彼らはまとまりのない農民組合を指導していただけ

で、経験は何もなく、具体的にどうすればこの五つの県の農民全員を組織でき、心を一つにして暴動に参加させられるのか、まったくわかっていなかった。しかしこの五十七人はいささかも躊躇せず暴動の前線司令部を構築した。彼らは「武漢まで進撃し、ソビエト共和国（労働者農民兵士の政權ソビエト）」をうち建てよう！というスローガンを提起し、急いで赤旗を五枚作って分与した。これ以外に彼らは、農民組合員たちに情熱あふれる革命歌を何曲か教えた。その後、李京生と学友たちが紅衛兵の隊伍を組んで天安門広場を行進したとき、やはりこれらの歌をおびただしい回数、まさに喉が熱血で張り裂けるまで、高らかに歌ったのだ。

労農兵は団結せよ、進め、心を一つに！

労農兵は団結せよ、進め、敵を打ち殺せ！

我らは勇敢に、我らは団結し、我らは戦う、

帝国主義反動派の大本営を打ち殺し、

最後の勝利は必ず我ら労農兵のものだ！

しかし一九二七年十二月、勝利のスローガン一つと鮮やかな赤旗を五枚持ち、高らかに革命歌を歌った農民たちは、やはり機関銃の嵐の前に敗北した。それから何年も経って、銀城市観光局の上層部が苦心慘愴して、武漢や重慶の外国人観光客を銀城に惹きつけて長江を遡らせようとしたと

き、彼らは長江が長すぎて遙かな距離があり、多くの不都合が存在することによろやく気付いた。しかしそれでも、一九二七年十二月、あの五十七人の共産黨員たちは党中央の命令を断じて守り抜き、南昌蜂起（一九二七年八月一日江西省南昌で共産党指導部周恩来、朱徳らの指導により起こされた武装蜂起、この日は現在の解放軍の創立記念日ともなっている）と秋季收穫暴動（一九二七年九月九日共産党指導部毛沢東により湖南省東部を中心に展開された武装闘争、南昌蜂起、広州蜂起と並ぶ中国共産党指導の三大武装蜂起のひとつ）を模範として、正義のために一切をなげうつ情熱をもって、火のように熱い胸を張り機関銃の嵐を迎えたのだ。彼らの最初の戦略目標は暴動を起こして銀城を奪取することだった。

楊楚雄連隊長が軍資金の献上されるのを自信たつぷりの余裕で待ち、魚釣りの台の上にとつかと腰をおろしていたとき、高山塩場（ガオシェンヤン）は陳狗児を頭とする赤衛隊によつて、地方守備兵營の武装を解除され、古くからの資産家高炳輝の首は切り落とされていた。赤衛隊は高家のすべての男を殺して高炳輝の食糧と家財を分配し、高炳輝の髪を麻縄で縛つて首を竹竿に吊るし通りを練り歩いた。その向かうところはどこでも鈴なりの人垣ができ、天地を揺るがした。陳狗児は胸を大きくはだけて高家から押収した一丁のモーゼル拳銃を腰帯に差し、頭には赤衛隊の印である赤い布を巻き、赤い布の房を付けたギラリと光る鬼頭刀（青竜刀のような幅広の刀、刀身に鬼の彫り物がある）を手にひつ提げて、地方のボスどもや軍閥を打倒せよというスローガンを、先頭に立つて何度も繰り返して叫んでいた。叫んでいるうちに気分が良くなると、彼は幅広の鬼頭刀を胸の前に構えて宙を横ざまにさつと切った。その格好は川劇（四川の地方劇、京劇）の舞台の黒臉武生（黒い隈取の立ち回り役）が絶好の決め台詞で見得を切るのにそっくりだった。

「俺様は張獻忠（明末の農民蜂起の指導者、成都に入ったて皇帝を自称し、大虐殺をおこなった）の生まれ変わりだ、欲張りどもを叩き殺してやる！」

陳狗児は有言実行、赤衛隊の行く先々で殺しまくった。こうして多くの血まみれの首が麻縄で括りつけられ、大みそかの灯籠のように、近隣近在の大通りから路地裏まで担ぎまわされた。そして先祖代々飢餓と抑圧に苦しめられてきた農民たちは、まるで祭礼を迎えるかのように、暴動を受け入れたのである。暴動前線司令部が抱いていた大きな心配は、こうした天地を揺るがす歓迎によって完全に消え去り、五十七人の共産党員は自分たちが大衆の力を低く見ていたと深く恥じ入り、右翼日和見主義（闘争を回避しようとする考え方）に反対する党会議を開催すべきだという提案まで出るほどだった。しかし革命の進展とともに、予想外の問題も浮上してきた。あの卓越した功労者である陳狗児が、金持ち殲滅と食糧押収以外に、ある日資産家の大家（たかり）の男全員を殺した後、女たち全員を令嬢の部屋に押し込め、まず全員にしっかりと化粧をさせてから身に着けていたものすべてを一斉に脱がせて、この色白の令嬢や夫人たちを大笑いしながら順繰りにみんな「味見」したのである。しかも論功行賞を行って、彼の部下たちにそれ相応の分け前を与えて共に愉しんだのだ。暴動前線司令部はこの知らせに愕然とした。もつとも革命的で、もつとも意志堅固な陳狗児がこんなことをしでかすとはまったく思いもよらなかつたのである。彼らはただちにこうした行為を制止して、陳狗児に厳しく警告することを決定した。こういう凌辱行為はボルシェビキ（レーニンの率いた多数派、ソ連共産党の前身）の精神とソビエトの原則に著しく反するものであり、このような事案が再発するなら厳罰をもって処分すると。功績

の大きさを鼻にかけていた陳狗児は、あからさまに不満の態度を示した。

「なんでそんなにぐちゃぐちゃ言いやがるんだ、人を殺せって言っておいて、今度はボルシエビキだソビエトだつて、何をほざきやがる！」

とうとうある日、陳狗児は土地のボスや資産家に属する夫人や令嬢たちを一通り味わつてしまつて、今度は貧農や雇われ農民出の下働きの女たちの味見を、これも一通りやつてしまつた。暴動前線司令部はもはやこういう敵味方の見境のない、無法な行為を許すわけにはいかなかった。彼らは即座に代表を派遣して、陳狗児の赤衛隊を接収し隊長の職務を解き、当地でその身柄を拘束監禁し他の追隨者への警告とするよう手配した。しかし派遣された代表たちは、まだ現地に到着する前にあの機関銃の嵐にさらされて全滅した。あらゆる農民赤衛隊の中で、陳狗児の部隊の抵抗がもっとも凄烈で頑強だった。彼らは勇敢に最後の一人が倒れるまで戦い、隊長の陳狗児は負傷して捕虜となった。

それからずいぶん経つて、人々はその暴動のことをすっかり忘れ、陳狗児という名前も忘れてしまった。当時おびただしい死体が横たわっていたこの原野も、今では五穀豊穡の田野となり、夕暮れに畑から牛が帰り稲穂が波を打つ安らぎの中で、黄昏の風や雨とともに、物の怪のような白鷺がいつも優しく舞い降りるのだった。

一九二七年十二月の銀城暴動は、最後に三千八百人以上の農民の銃殺と街中を引き回しての斬首によつて終息した。あの五十七人の共産黨員は誰も禍を免れることはできず、彼らの首は切り落と

されて五つの梟城の城門に分けて吊るされた。そのまま一年間、髪が抜け落ち肌が腐乱して五十七個の恐ろしい髑髏となるまで、吊るされていたのである。勝利した側は復讐のために、そしてそれ以上に、謀反人の反抗する勇気を永久に喪失させるために、生きたまま捕獲した暴動の最高指導者趙伯儒と、あの名声の轟き渡った伝奇的人物陳狗児を銀城まで護送し、他に赤衛隊の農民十名を同時に処刑するため別途連れてこさせた。銀城軍営の練兵場の向かい側には、山肌に沿うようにして処刑の高台が築かれた。処刑の日、人々は噂に高い陳狗児を一目見ようと、街を挙げての大騒ぎとなった。最初の処刑は当然、恨み骨髓の陳狗児だった。彼らは着衣を剥ぎとって丸裸の陳狗児を太い杭に縛り付け、首切り役に命じ三日月状の小刀で陳狗児の巨大な生殖器を切断させた。五つの梟の有力者たちは、令嬢や夫人たちを何度にもわたって賞味したこの器官に対し、ソビエトだとかポルシェビキだとかいう何だか訳のわからぬ外来のしろものよりも、ずっと具体的で生々しい憎しみを抱いていたのである。鋭利で凍りつくような激痛とともに血まみれの陳狗児は男性を喪失したが、地面に投げ出された無用の肉塊に目を向けながら、狂ったように罵りとおした。

「俺様は、我ながらよくやったぞ、あと二十年経ったらまた英雄になって現れるんだ……俺様こそポルシェビキだ！俺様こそソビエトだ！俺様は謀反を起こす！……俺様は張獻忠の生まれ変わりだ、来世もまたやつぱり張獻忠になって生まれてくる、そしてやつぱりみんな叩き殺してやるからな！……」

この命の最期の瞬間に叫んだ罵声は、かすれ引き攣れて、張り裂け、もう人の声とは思えないも

のようになっていた。続いて首切り役がまたあの鋭利な小刀で陳狗児の舌を切り落としたので、言葉が一切出なくなったのだが、それでも陳狗児は杭に縛られたまま眼を怒らして身体を苦しげによじり、憤怒の形相で何度も鮮血を吐き出していった。彼がまた罵声を叫び続けているのは誰の目にも明らかだった。この身体をよじりながらの罵声は、首切り役が湯気の立ち上る心臓を手に取りだしたとき、突然止まった……しばらくの間、刑場のすべてが騒然となり、殺人をしに来た者も、殺人を見に来た者もみんな陳狗児の驚天動地の憤怒に震え上がった。

一九二七年に初級中学の生徒だった李乃之は大きく目を見開いて、血まみれの陳狗児があつての叫びをいきなり止めるのを見た。それから自分の啓蒙の師である趙伯儒が処刑台の上に引き立てられるのを見た。長衣に鼻眼鏡の趙伯儒はいつものように、従容としていて冷静だった。そしてやはり、いつものように質素で優雅だった。しかし趙先生が手錠を嵌められた両手を挙げて顔にかかった乱れ髪を払おうとしたとき、その髪の下に失敗者の憔悴と蒼白とがさつと現れた。続いて先生は後ろを向き、心臓も舌も生殖器も失った陳狗児の無残な遺骸に対して、深々と身をかがめて礼をした。それから先生は両手を挙げて、自分がどのような姿で処刑されて果てるかを見に来た、海のような人の群れをぐるりと指しながら話しかけた。「苦しんでいる大衆は殺しつくせない、共産党員は殺しつくせないんだ！」と。その後、彼は拳を握って、手錠の鎖をガチャガチャ鳴らしながら叫んだ。

「将来の地球を見よ、必ずそれは赤旗の世界だ！」

李乃之にはよくわかった。この李大釗リダグイヂヤオ（北京、学教授、中国共産党創立者の一人、一九二七年四月処刑）の名言は銀城中学の「青年読書会」で、趙伯儒が何度も読み聞かせてくれた言葉だった。ただ彼には、本や授業の中で詩のように昂揚して語られたあの理想が、今日このようなほとぼる鮮血の中で響くとは、想像も及ばぬことだった。

続いて三人の首切り役が処刑台に上がってきて、二人が先生の腕をねじり上げ、汚れきった大きな枕木に抑えつけた。そしてもう一人が高く上げた大きな斧を振り下ろしたとき、鈍い響きとともに、先生の知識と理想、主義と真理、詩と情熱のいつぱい詰め込まれていた頭部が切り落とされた。彼らは家畜を屠殺するように先生の悟りと落ち着きを屠り、質素と気品を屠って、おびたしい血の海の果てに李乃之の理想を流し去った。李乃之は眼を大きく見開いていたが、先生の首が吹きあがる血潮に塗れてドーンという音とともに枕木から転がり落ちるのを見たとき、人ごみの中で気を失って倒れた。後に、彼が共産党員となって、処刑に直面することになったとき、李乃之はようやく先生の悟りと落ち着きとを会得することになるのである。

陳狗児と趙伯儒を殺してから、首切り役たちは十人の農民赤衛隊員たちを十本の杭に縛り付け、一人一人の背中に灯油を満杯にしたバケツを針金で括りつけた。それから十本の燃え盛るたいまつをバケツに投げ入れると、むごたらしい悲鳴があたりを覆い、生きていた十人が喚き叫ぶ十本の火柱となった。人々はこの凄惨な生き地獄を、背筋を凍らせながら見つめていた……二日後、黒こげ

の杭に縛られた燃えきれない遺骸が、見るも恐ろしい姿でまた痙攣しているのを目撃した人がいた。本当は一九二七年十二月の銀城暴動の一番大きな勝利者は楊楚雄だった。彼がやすやすと農民赤衛隊を打ち負かしてからは、当然の道理で、自分の部隊の軍資金が銀城の繁栄を謳う千にも上る塩井の中に深々と根を下ろすことになった。このいくら使っても尽きぬ資金の源ができてから、彼の部隊は連隊から師団へと速やかな拡大を遂げ、やがて軍団へと成長した。数年後、蔣介石校長が天下を統一し、各地の軍閥諸侯を国軍に編入したとき、楊楚雄は理の当然として輝ける中將の位に任じられるのである。

### 三

かなり時間が経ってから、李京生は調査の結果、父李乃之が大清宣統二年庚戌の年、つまり犬年の生まれであることをはじめて知った。あのころの中国人はまだ、西曆一九一〇年のような西洋風の計算で年月を表すことに慣れていず、宣統帝が秦の始皇帝以来二千百三十一年の帝政における最後の皇帝であり、宣統二年がこの二千百三十一年最終の時点であることも知らなかった。

大清宣統二年、中国人がまだ慣れていなかった西曆一九一〇年、旧曆の九月二十九日、銀城牌坊街李三公の邸宅の中では元氣のいい男児の産声とともに、一家中がホッと安堵のため息をついた。九思堂李氏一族三家の子孫たちは増え広がっていたのだが、ただ李氏三公の一門だけは続けざ